冬の北海道旅行に対する道内居住の障害者と健常者の意識調査

Disabled and Able-Bodied Residents' Awareness for Their Traveling Hokkaido

三浦春菜*・新谷陽子**・原文宏**・秋山哲男***
Haruna Miura　Yoko Shintani　Fumihiro Hara　Tetsuo Akiyama

摘　要

本論文は冬季の北海道において，北海道内に居住する障害者及び健常者を対象に，各障害毎に，旅行に対してどのような希望を持っているかを定量的に明らかにすることを目的とする。調査の方法として，アンケート及びヒアリング調査を北海道に居住する肢体不自由者，視覚障害者，聴覚障害者，健常者を対象に行った。調査の結果，旅行ニーズの比較では，「ウインタースポーツ」「景色」の項目において，障害者は健常者に比べ希望が低い。しかし，障害別に見ると，聴覚障害者は他の障害者に比べ，希望が高いことが明らかになった。次に，旅行ニーズの優先順位については，障害者，健常者共に，順位の高いものから費用，日程，目的，形態であった。

1. はじめに

1.1 背景と目的

北海道は日本でも有数の観光地である。北海道内での観光消費額は，道内総生産額の6.1%を占め，農林水産業の3.7%を超えて，北海道地域の経済や雇用に重要な役割を担っている[1)2)]。しかし，冬期間は観光入込客数が四季の中でも一番少なく，年間を通じていかに観光客数を安定させるかが北海道の観光産業の課題である[3)]。そのため，冬期観光入込数の増加方策が求められており，高齢者や障害者を含む幅広い層の観光客が，冬でも北海道旅行を楽しめる旅行メニューと受け入れ体制の整備が必要になっている。さらに，幅広い層の観光客に対応するための，観光施設のバリアフリー化なども必要となっている。

しかし，ホテルなどの観光施設のバリアフリー化に関する調査研究に比べて，冬季における高齢者や障害のある観光客のニーズや希望に関する調査研究はあまり行われていないのが現状である。

そこで本研究は，北海道内に居住する障害者を対象に，冬季の旅行の希望やニーズの順位を把握することで，観光の受け手側のソフトやハードにわたるサービス提供を考える上で，何が優先的に必要かを明らかにすることを目的とする。

まず，各障害毎に，旅行に対してどのような希望を持っているか，また希望に健常者との違いがあるかを明らかにした。次に，障害者と健常者のニーズの優先順位を明らかにし，優先順位が高かったニーズについて現在の状況からどう改善する必要があるかを考察した。

1.2 障害者の旅行に関する研究レビュー

障害のある人の旅行に関する研究は施設のバリアフリー化の観点からアンケートやヒアリング調査を行っているものや，モニター調査を行ったものがある。

障害者・高齢者等の移動についての研究は買物や病院などの日常生活の移動が中心で，旅行などの遠距離の移動や，余暇・レクリエーション・楽しみのための移動の研究はまだ少ない。

現在，国土交通省ではユニバーサルデザインによる観光促進についての調査が進められており，国においても，これまで行われていなかった，ユニバーサルデザインと観光をあわせた取り組みが進んでいる[4)]。また，自治体の取り組みとしては，高山市がモニター旅行によるヒアリングを踏まえた歩道の段差解消等を行っており，直接障害者に話を聞いて改善し，さらに同じモニターに改善箇所の確認も行っており，地域住民だけでなく，訪れる人のためのバリアフリー化が進められている[5)]。さらに千葉県ではユニバーサルツーリズムを掲げ，障害者が旅行の計画から観光地を周遊するまでどのような対応が必要か，詳細に述べられたヒント・事例集を作成している[6)]。

また，以下の3論文では障害者の旅行に際しての問題点や効果を明らかにしている。

*首都大学東京大学院都市科学研究科
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (9号館)
e-mail　m_halu@hotmail.com
**（社）北海道開発技術センター
〒060-0051 札幌市中央区南1条東2丁目11
***首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学専攻
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (9号館)

北川ら[7]は視覚・聴覚障害者，車いす使用者を対象にヒアリングを行い，障害のある人の国内・海外旅行による精神的効果の高さを示し，課題としては事前情報の収集，ガイド・ヘルパーの確保，車いすの対応等があることを明らかにしている。北川ら[7]の論文は，健常者と同様の旅行を実現するために必要な対応について述べてられており，本論ではその前段の，障害者が何を希望し，それが健常者とどう相違があるかを述べている。

内藤ら[8]は北海道内在住の視覚障害者と北海道外在住の車いす使用者を対象として冬季の北海道モデル旅行を行い，計画から旅行中の移動，宿泊や体験までを含めて調査分析を行っている。結果として，移動や宿泊の際に利用可能かどうかの旅行前段階での情報不足が指摘されている。

新谷ら[9]は，北海道以外に居住する車いす使用者と視覚障害者を対象にした冬季のモニター旅行を行い，車での移動や，徒歩，そりを使った移動，トイレの利用，施設等における詳細なヒアリング調査を行った。その結果，観光施設の体験より，雪そのものの体験，地元の人とのふれあいについてモニターの満足感が高かった。

内藤ら[8]，新谷ら[9]の論文は，障害者を対象とした詳細な調査であるが，本論では，健常者との比較を中心に調査を行った。

本研究では，既存研究の少ない冬季の障害者の旅行ニーズ，旅行希望について詳細に把握し，障害別の分析や健常者と比較することによって，冬季の障害者の旅行ニーズや課題を定量的に明らかにするとともに，今後の障害者の冬季旅行のあり方について考察した。

II. 調査内容

2.1 調査方法

調査は2006年3月に行った。調査票を郵送で配布，郵送で回収を行った。調査票への記入等が困難と考えられる被験者には，調査員が訪問し，調査票に記入を行った。

2.2 調査内容

質問紙には，身体属性（属性，使用器具，使用車両，介助の種類），旅行ニーズ（雪まつり，食事，温泉，買物，ウインタースポーツ，景色）旅行に関わる項目の優先順位（目的，旅行形態，日程，費用）についての質問を記載した。

ガイドや介助が必要か，使用可能な車両は何か，誰と行きたいか等の質問を行い，それを前提として各希望や優先順位を回答していただいた。旅行ニーズの内容の設定については，プレ調査を行い，その中で多く指摘されたニーズを取り上げている。上記について，身体属性については単純集計，旅行ニーズについては得点化して集計分析，優先順位については一対比較法により分析を行った。

2.3 調査対象

冬に慣れており，冬の旅行にそれほど抵抗がないと考えられた，北海道に居住している，主に札幌在住者を対象に調査を行った。肢体不自由者26名，視覚障害者31名，聴覚障害者23名及び健常者76名を対象とした。

III. 調査結果

3.1 調査対象者の属性

(1) 身体属性

被験者の年齢の割合を表1に示す。障害の等級については，表2の通り，肢体不自由者と視覚障害者は1級の割合が高くなっている。また，聴覚障害者は，2級の割合が高くなっており（聴覚障害者は重複障害以外は2級まで），重度の障害者が中心となって回答されている。介助の有無，使用車両については，使用する場合のみ回答することとした。介助の有無については，視覚障害者に対応した手引，車の乗降介助，歩行空間での滑りなどに対応した介助，その他の項目から必要なものすべてに回答していただいた。使用車両は，リフトなし観光バス，回転シート付き車両，車いす対応車両，ストレッチャー対応車両の中から，使える車両についてすべて回答していただいた。

図1の介助の有無については，χ^2検定（有意確率0.01）より各障害の傾向に違いが見られ，聴覚障害者は質問にあるような介助は必要ないと考え，未回答が多いと考えられる。また，視覚障害者は対応した手引，肢体不自由者は車の乗降介助の回答が多かった。

表1　各属性ごとの年齢割合

	健常者		肢体不自由		視覚障害		聴覚障害	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
10代、20代	22	29.3%	0	0.0%	1	3.2%	2	8.7%
30代	20	26.7%	2	8.0%	2	6.5%	4	17.4%
40代	17	22.7%	6	24.0%	2	6.5%	4	17.4%
50代	10	13.3%	10	40.0%	8	25.8%	11	47.8%
60代以上	6	8.0%	7	28.0%	18	58.1%	2	8.7%
合計	75	100.0%	25	100.0%	31	100.0%	23	100.0%

表２　障害の等級

肢体不自由			視覚障害			聴覚障害		
	実数	%		実数	%		実数	%
1級	20	83.3%	1級	25	83.3%	1級	2	9.1%
2級	4	16.7%	2級	4	13.3%	2級	19	86.4%
合計	24	100.0%	3級	0	0.0%	3級	1	4.5%
			4級	1	3.3%	合計	22	100.0%
			合計	30	100.0%			

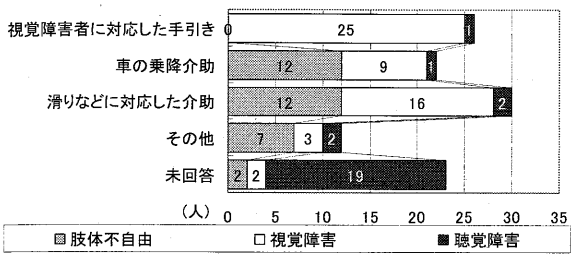


図１　介助の有無（複数回答を含む）

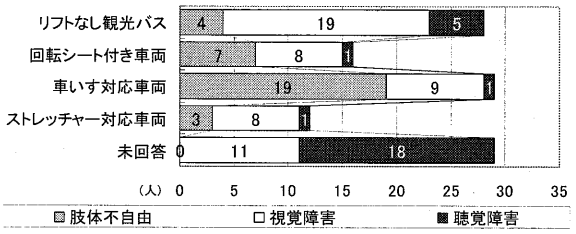


図２　使用車両（複数回答を含む）

図２の使用車両についても，χ^2検定（有意確率 0.01）より各障害ごとに傾向に違いが見られ，聴覚障害者は介助と同じく特別な車両は必要ないと考え，視覚障害者についてはリフトなしの一般的な観光バスの回答が多く，車いす使用者は車いす対応の車両の回答が多かった。

(2) 外出・旅行頻度

日常的な外出については，図３のとおり，週５日以上と，週 3～4 日を含めると 70%以上を占め，どの障害者も健常者と同様に外出を行っている。障害別に見ると，χ^2検定（有意確率 0.01）より障害ごとに傾向に違いが見られ，聴覚障害者は他の障害者より週５日以上の外出の割合が高く，健常者と近い割合となっている。

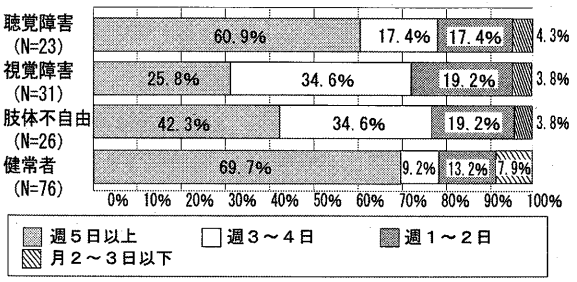


図３　外出頻度

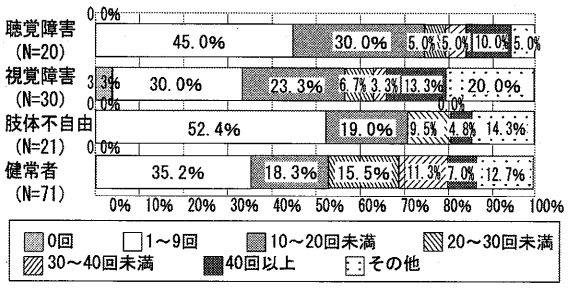


図４　北海道旅行の回数（回/年）

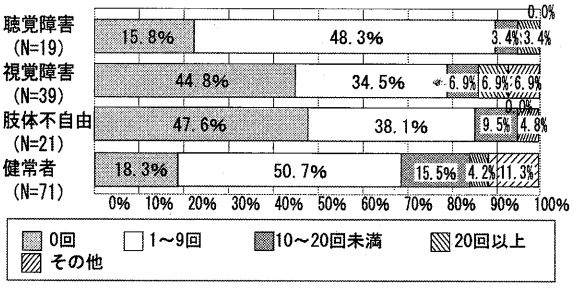


図５　冬の北海道旅行の回数（回/年）

北海道内の１年間の旅行回数については，図４の通り，1～9 回の割合が高く，その中でも 6 から 7 回の割合が高い。0 回の割合は低いが，北海道内での冬季の旅行の回数については，図 5 の通り，0 回の割合が，視覚障害者や肢体不自由者では 40%台となっている。ただし，障害ごとに有意な差は見られなかった。

(3) 冬季北海道旅行意向

「冬に北海道を旅行したいと思いますか？」という問に対して，図 6 より，視覚障害者と肢体不自由者は半数以上の回答者が，冬に旅行したいと思っていない。χ^2検定（有意確率 0.01）より各障害の傾向に違いが見られ，肢体不自由者と視覚障害者は旅行したいと思わない割合が半数以上であり，聴覚障害者は健常者と同様に旅行したいと思う割合のほうが高くなっている。

冬季の北海道旅行の希望を増加させるために，寒さを感じずにすむ対策や，寒さを楽しむことができるメニュー，さらには寒さ，積雪によるバリアの改善などが対策として考えられる。

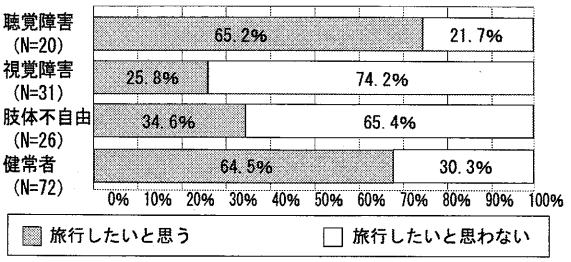


図６　障害別冬季北海道旅行希望

3.2 健常者と障害者の旅行ニーズの比較

旅行先でしてみたいことについて障害者と健常者の比較を行った。

「とてもしてみたい」を5,「してみたい」を4,「どちらでもない」を3,「あまりしたくない」を2,「全然したくない」を1として得点化し，平均値を求め，それを障害者，健常者の希望度とした。ウィルコクスンの順位和検定を行い，健常者と障害者の希望について，統計的に有意な差が見られたのは「買い物」と「ウインタースポーツ」,「景色」の項目においてであった。

以下，表3の内容を述べる。

表3　障害者と健常者の希望度

		希望度		有意確率	有意
		健常者	障害者	(両側)	水準
雪まつり	雪まつりの雪像を自分でつくる	1.86	1.92	0.867	
	雪まつりの雪像にさわってみる	2.28	2.18	0.237	
	雪像を見たい	2.66	2.45	0.215	
	雪まつりの雪像を作っている人と話をする	2.03	2.18	0.512	
食事	その場でとれたてを食べさせてくれるお店に行く	4.50	4.54	0.546	
	雪景色を眺めながら食事をする	3.64	3.33	0.259	
	店の人と気軽に会話し、食事ができるお店に行く	3.18	3.45	0.199	
	いろいろなメニューがあるお店に行く	3.79	3.96	0.286	
温泉	露天風呂のある温泉に行く	4.63	4.31	0.141	
	新しい設備の整った温泉に行く	4.19	4.16	0.618	
	湯船で地元の人と会話ができる温泉に行く	3.03	3.26	0.318	
	昔からある伝統的な温泉に行く	4.36	3.87	0.104	
買い物	その場でしか作られていないものを売っているお店に行く	4.01	4.15	0.280	
	品揃えが豊富なお店に行く	3.64	3.92	0.092	
	とれたての新鮮なものを売っているお店に行く	4.28	4.39	0.226	
	お店の人と気軽に会話ができるお店に行く	3.09	3.61	0.007	＊＊
ウインタースポーツ	ウインタースポーツの観戦	3.26	2.43	0.000	＊＊
	スキーやスノーボードの体験	3.12	2.53	0.012	＊
	雪合戦の体験	2.50	1.90	0.002	＊＊
	スノーモービルや犬ぞりの体験	3.62	2.78	0.001	＊＊
景色	テレビや映画のロケ地へ行く	2.78	2.59	0.339	
	冬景色(雪原、流氷等)の美しい場所へ行く	4.16	3.22	0.001	＊＊
	流氷や吹雪の音を聞く	3.04	2.30	0.001	＊＊
	冬の街中を散歩する	3.05	2.49	0.014	＊

（＊＊は1%有意　＊は5%有意）

(1) 障害者と健常者で差が出なかった項目

①雪まつり

「雪まつり」の設問については障害者と健常者の有意な差は見られず，両者とも中央の数値である3より低いため，希望は低いと考えられる。札幌在住者が多く，雪も見慣れているため，希望が低かったのではないかと考えられる。

②食事

「食事」についても障害者と健常者の希望の差は見られなかったが，3以上の値のため希望はあるといえる。「とれたてを食べさせてくれるお店に行く」希望について，一番高い値を示した。

③温泉

「温泉」についても障害者と健常者の希望の差は見られないが，3以上の値のため，全体的に希望はあるといえる。特に「露天風呂」についての希望が一番高い。

(2)障害者と健常者で差が出た項目

①買い物

「買い物」については「お店の人と気軽に会話できるお店へ行く」の項目は有意な差があり，障害者のほうが希望が強いといえる。4つの項目全体を見ても，3以上で，希望があると考えられる。「新鮮なものを売るお店」について希望が高い。「お店の人と気軽に会話ができるお店に行く」希望が障害者で高く，健常者の希望度が3.09に対して，肢体不自由者が3.42，視覚障害者が3.77，聴覚障害者が3.61と，聴覚障害者だからといって会話のやり取りを希望していないとはいえないことがわかる。聴覚障害者についても買い物が楽しめるよう，地元の人とのふれあいが課題となる。

②ウインタースポーツ

「ウインタースポーツ」については各項目において，障害者は健常者より希望が低いが，健常者は「雪合戦」以外は3以上で，特に「スノーモービルや犬ぞりの体験」に希望がある。

障害別に希望を見ると，図7より，クラスカルーウォリスの順位和検定（有意確率0.01）より有意な差が見られ，「スノーモービルや犬ぞりの体験」,「ウインタースポーツの観戦」においては，聴覚障害者では3以上であり，希望が見られる。

「ウインタースポーツ」は障害者にとっては用具の使用が難しいと考え，希望が少ないと考えられるが，聴覚障害者については観戦など3項目で他の障害者と比べ，希望が高く，傾向が異なった。聴覚障害者は視覚障害者や車いす使用者に比べ，コミュニケーションを除くとば健常者とほとんど変わらないことが多く，ウインタースポーツをより楽しんでもらえるような工夫が特に必要なのではないかと考えられる。

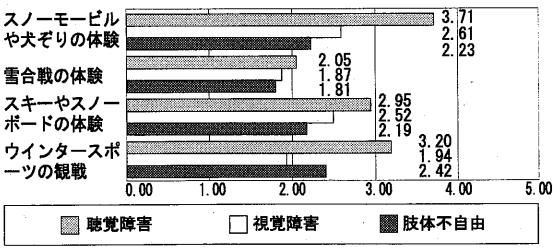


図7　障害別の「ウインタースポーツ」希望項目

③景色

「景色」の項目については，障害者は健常者に比べ，

全体的に希望が低い。また，「テレビや映画のロケ地へ行く」については障害者，健常者共に希望が低かった。「冬景色の美しい場所へ行く」希望については健常者と障害者ともに希望が高い。

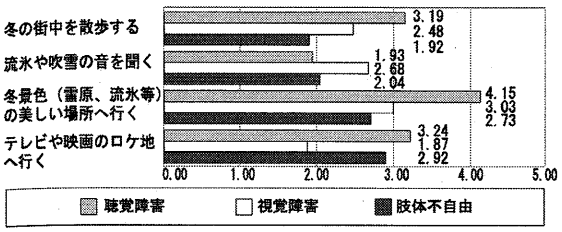


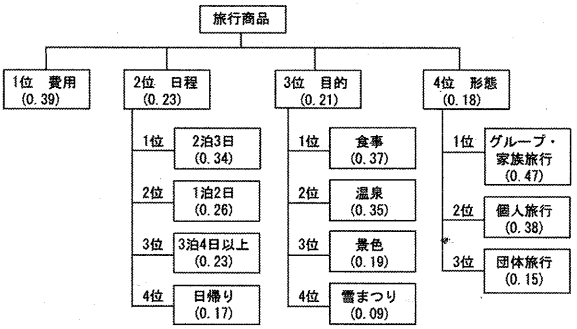
図 8　障害別の「景色」希望項目

障害別に見ると，図 8 より，クラスカルーウォリスの順位和検定(有意確率 0.01)より有意な差が見られ，肢体不自由者や視覚障害者はほとんど 3 以下で希望が低いのに対し，聴覚障害者は，音を聞く項目以外は，希望が他の障害者に比べ高い。「冬景色の美しいところへ行く」ことについても，移動の困難が少ないため，聴覚障害者は，他の障害者に比べ，希望が高い。ここでも，聴覚障害者は視覚障害者，車いす使用者，健常者とは異なるコミュニケーションの工夫が必要となる。視覚障害者や肢体不自由者はその場所へ行くまでの移動の問題や寒さの問題を考え，希望が少ないのではないかと考えられる。外で活動が可能な整備と介助の工夫の両面からの改善が必要となると考えられる。

3.3 一対比較による旅行ニーズの優先順位

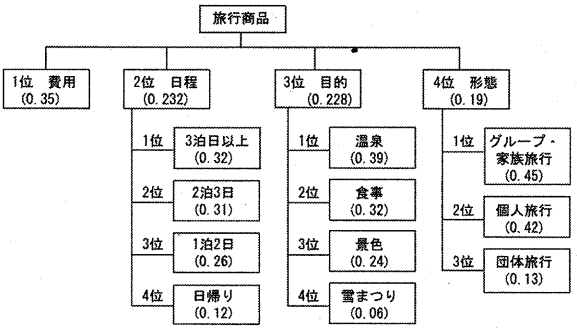
旅行に行くにあたり重要なこととして，「旅行目的」，「旅行形態」，「旅行日程」，「旅行費用」を取り上げ，それぞれどちらがどの程度行いたいか，例えば「旅行目的」と「旅行形態」ではどちらかが『非常に重要』，『やや重要』，『同じくらい重要』かにチェックするという方法で質問を行った。また，「目的」は，「食事，温泉，景色，雪祭り」について，「形態」は，「グループ・家族旅行，個人旅行，団体旅行」について，「日程」は，「日帰り，1 泊 2 日，2 泊 3 日，3 泊 4 日以上」についても，細項目として同様に質問を行った。すべて AHP 法の一対比較を用いて分析を行った。一対比較とは，2 つずつ項目を取り上げ，どちらがどの程度重要かを比較・評価を行うことである。

結果として，図 9，図 10 より，障害者と健常者共に旅行商品について重要視する順番は，費用が一番重要で，次に日程，目的，形態の順となっている。障害者と健常者の異なる点についてはまず，日程であり，障害者は 3 泊 4 日以上の順位が低い。次に目的では障害者は温泉より食事の順位が高い結果となった。日程については長い間，不慣れな場所に居続けることは身体的な負担が増加するため，2 泊 3 日が限界と感じているのではないかと考えられる。また，目的において，障害者は健常者に比べ，食事のほうが温泉より順位が高かった。



（　）は重みの平均値

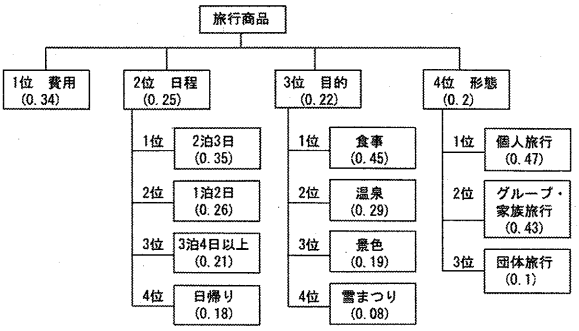
図 9　障害者全体の希望順位



（　）は重みの平均値

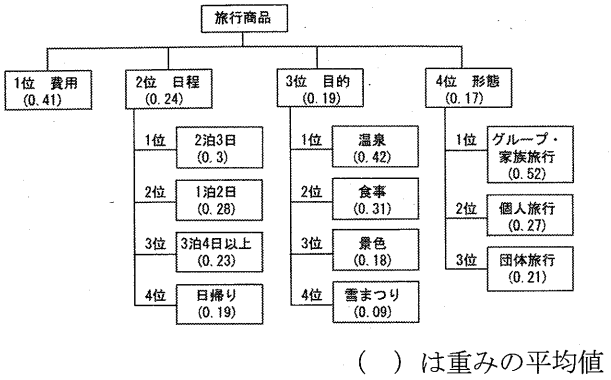
図 10　健常者の希望順位

障害別に見ると，図 11 より，肢体不自由者は個人旅行が 1 位であることと，図 12 より，視覚障害者は温泉が 1 位となっている。図 13 より，聴覚障害者は目的のほうが日程より重要となっている。



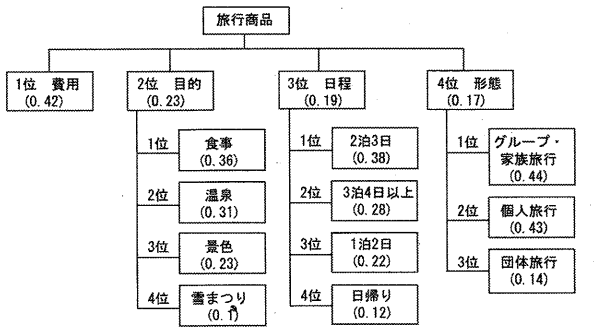
（　）は重みの平均値

図 11　肢体不自由者希望順位



（　）は重みの平均値

図 12　視覚障害者希望順位



（　）は重みの平均値

図 13　聴覚障害者希望順位

IV. まとめ

障害者と健常者の旅行ニーズの比較では,「ウインタースポーツ」「景色」の項目において，障害者は健常者に比べ希望が低くかった。しかし，障害別に見ると，聴覚障害者は他の障害者に比べ，希望が高いことが明らかになった。

また，優先順位については費用，日程，目的，形態の順となり，費用について，まずは優先的に考える必要があることが明らかとなった。優先順位で障害者と健常者の異なる点はまず，日程であり，障害者は 3 泊 4 日以上の順位が低い。次に目的では障害者は温泉より食事の順位が高い結果となった。日程については長い間，不慣れな場所に居続けることは身体的な負担が増加するため，2 泊 3 日が限界と感じているのではないかと考えられる。そうであるならば，ツアーを組む場合，あまり日程の長いツアーは一考する必要がある。また，目的において，障害者は健常者に比べ，食事のほうが温泉より順位が高かったが，これについてもどのような理由で順位の逆転が生じているのか，今後詳細に見ていく必要がある。

これらの結果から，冬ならではのサービス（ウインタースポーツや冬の景色等）については障害にあった提供の仕方が必要であると共に，費用面での工夫が最も求められていることが明らかになった。

V. 今後の課題

アンケートの回答について，ウインタースポーツと景色の項目においては，障害者の希望が低かったが，この理由は単に寒さがいやだから，スポーツすることがいやだからというだけでなく，障害のため，スポーツや景色を見ることができそうにないから，または現地まで行けないだろうと考え，希望しないという意味も含まれている可能性がある。また，旅行ニーズについては内容についてさらに精査が必要である。

分析方法では一対比較による分析を行ったが，この分析方法は要素が独立している必要があり，要素間の影響を考えることができない。旅行商品全体として考えた場合,「この費用と目的ならこちらを選ぶ」などといった回答者の考えが含められるよう，相互の影響をふまえた調査を行う必要がある。

今後は北海道以外の居住者に対して同様の調査を行う予定である。それをふまえ，北海道内外の居住者による希望を検討し，障害に応じた冬の北海道旅行についての課題と対応策を検討する予定である。

参考文献

1) 北海道観光産業経済効果調査委員会 2006. 第 4 回北海道観光産業経済効果調査報告書.
2) 北海道企画振興部 2007. 平成 16 年度道民経済計算年報.
3) 北海道経済部観光振興課 2004. 北海道観光入込客数調査報告書，平成 15 年度: 3.
4) 国土交通省ホームページ
http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/kanko/links.html（アクセス日 2007 年）
5) 山本誠 2003.「モニターが創ったバリアフリーのまち」. ぎょうせい.
6) 千葉県商工労働部観光課 2006. ユニバーサルツーリズムヒント・事例集.
7) 北川博巳・秋山哲男・増田隆・草薙威一郎・目黒力・本田恵子 2001. バリアフリーツーリズムに関する考察. 福祉のまちづくり研究会第 4 回全国大会概要集，163-166.
8) 内藤恵・新谷陽子・原文宏 2005. 北海道における移動制約者の旅行支援に関する研究. 第 8 回日本福祉のまちづくり学会全国大会概要集，175-178.
9) 新谷陽子・内藤恵・西村泰弘・秋山哲男 2005. 雪国のバリアフリーツーリズム. 第 8 回日本福祉のまちづくり学会全国大会概要集，279-282.